

大陸（南支）

死闘 大鳥山・羅漢山の激戦

栃木県 巽 政雄

入営時には既に両親はなく、十三人兄弟の中、四人は大震災で死亡しました。小石川で生まれたのですが、兄弟姉妹はそれぞれ親戚の家に預けられたり奉公に出たりしていました。私は洋服の縫製工場で働いていました。

入隊は新潟県の村松連隊です。中隊は遊佐隊です。昭和十七年九月から猛烈な初年兵教育を受け、佐倉連隊に転属になりました。転属と言っても大陸か南方かに配属になる前の一時預かりのような環境です。

十二月も押し迫って下関を出帆し、台湾經由、黄埔に上陸、広九鉄道で広東に向かい、昭和十八年一月一日に広東の出光隊に仮泊しました。

そこで独立歩兵第六十六大隊の第一中隊へ配属が決まりました。中隊長は柴田昌之中尉、第一小隊長は田中正巳少尉です。私は第一小隊でした。大隊長は井上進大佐です。私は三月まで第一中隊に属し、演習に勤務にと励みました。

四月に入ると富山准尉（人事係）に呼ばれ、「巽、お前は軍隊に入る前は背広や工具服を縫製していたのだから、大隊本部へ行き、縫工兵として働くように」と命令されました。

四月から約一年間本部勤務でした。本部勤務中は軍服や下着類の修理が主でしたから楽なものです。何し

ろ十年近くも入隊前に携わっていた仕事ですからお手
の物でした。それに珠江にかかっていた海珠橋を渡れ
ば、広東の繁華街の慶愛中路です。しかも空襲も敵襲
もありません。兵隊の悲しさ、外出の都度、中華料理
や飲茶を楽しむわけにもいきません。酒保によるか大
道の屋台に寄っていました。後段の湘桂作戦に比較す
ると、天国と地獄、天と地の相違です。復員後何回か
広東旅行を計画したのですが、未だその夢を果たして
いません。

緒戦の勢いはどこへやら、日本軍は孤島で玉砕につ
ぐ玉砕で、欧州戦線では独軍は撤退につぐ撤退です。
大隊本部は江門に位置し、第一中隊は新会県城を警
備していました。広東警備と異なったのは各中隊とも
小さな討伐や敵との小競り合いが多くなったことで、
本部にいてもよく分かりました。

当初、第一二五大隊（田賀）と警備地区の交替かと
思っていました。古兵はよく一年以上も同一地区を警
備したことはないから警備地区の単なる交替だと言っ

ていましたがそうではないらしく、何かあるなど噂し
ていました。初年兵には詳しいことは何も分からない
し知らされていません。

そのうち、近く大きな討伐があるとか、討伐どころ
か作戦に参加するとかの噂が大隊本部の兵に洩れ始め
ました。

突如として直兵団の新設です。節兵団は作戦部隊と
なり、広東周辺の警備は新設の直兵団が受け持つとい
うことです。

節兵団から一個大隊、各大隊から一個中隊、各中隊
から一個小隊を抽出し、独歩第二百四十二大隊を編成
することになったのです。各小隊とも九次の初年兵が
根幹になったため、村松―佐倉―広東―江門と苦楽を
共にした同年兵とも泣きの涙で北と南に別れました。

本部勤務の下士官、兵の大部分も所属の各中隊に帰
隊させられ、私も第一中隊の第一小隊に一年ぶりで復
帰しました。

各中隊とも戦意昂揚と整備上の必要から討伐が行わ
れ、我が第一中隊も馬熊・鼠熊等の討伐を行いました

た。圧倒的な火力の差と、相手は匪団で住民の支持もないため、我が中隊は一兵も損することなく、多大の戦果をあげることができました。

昭和十九年六月、湘桂作戦の命が下ったのでした。一兵隊の身で戦闘の全貌は分かる筈ありませんが、敵の飛行基地の覆滅と南方との交通路の打通が目的らしいと古兵から聞かされていました。

完全軍装で営門を出る時は緊張しました。なんとなく二度と帰ってこないだろうと予感がして悲しい気持ちになりました。

最初の作戦は三埠攻略です。三埠とは長沙・新昌・荻海からなり、古くから海外への移民の根拠地であり、華僑の送金で立派なビルも建っており、華南の部落は見た眼にはしゃれた都市に見えました。江門から三埠まで第一中隊が尖兵となりましたが、猛暑と豪雨と兵器装備が最大の重荷でした。各隊、それぞれ奮闘の後三埠を占領しましたが負傷兵が一人も出なかつたと聞き、幸先がよいと手を取り合つて喜びました。

三埠は広西省に通ずる要衝の地なので、敵は再三奪回のため襲撃してきます。各中隊はその都度撃退し、また大隊も守備に甘んぜず数回にわたり攻撃を実施しました。その最大のものは、長沙西方の竜山であり前後三回も討伐を行いました。七月初めの竜山攻略に第一中隊は第四中隊と共にその主力となり、竜山占領に威力を發揮しました。敗走する敵は部落に逃げ農民となつてしまします。徹底的部落掃討、検索は不可能です。

第二次竜山攻撃にも第一中隊は参加し、敵の三埠奪回の野望を粉碎しました。

猛暑の夏、梧州攻略の軍命令が出ましたが、その時は梧州とは知らされず、西へ西への進軍中、何かの機会に知り得たのでした。

三埠を出陣し開平・新興・鬱南・都城と行軍し戦い、戦闘し、休憩し、昼夜を分かたず梧州へ梧州へと猛進撃しました。三埠を出た時は勇氣凛々だったのですが一日一日背囊の重さが肩に食い込み、足に血豆ができました。九月十日出発以来約一カ月後、西江東岸

から梧州を望観できる峠に立ちました。「ああ、あれが梧州城だ」異口同音の言葉が発せられました。今までの苦勞もふっ飛び嬉しくなって跳び上がらんばかりでした。その時は後々のこと、迫り来る数百倍の苦勞のことには思いも及びませんでした。滔々たる西江の流れに眼をおとして放心していました。

九月末に梧州を出発、梧州北方八キロの小部落に移動し飛行場の整備につきました。その後道路工事と輸送路の開進を続けながら西へ西へと進みました。西江の流れの早いこと、西江沿いの道路の貧弱なこと、そのため輸送を水路に依存したこと等で兵一人一人に齎寄せが来ました。水流との戦い、まさしくそんな思いがしました。しかもP51の跳梁で昼間の行動はほとんど不可能でした。

夏服で三埠を出発した兵に秋から冬にかけての気候は厳しく、夜間行動の寒さは骨身にこたえました。

漢口・丹竹・平南・江口・潯州・白沙を経て貴県に達したのは十一月も半ばでした。貴県には第二十三軍

の軍司令部が進出し、柳州・南寧へと進撃して行ったことも聞き、その広東への帰路を我が兵団が守るのだとも聞きました。そのため我が兵団が中支軍の指揮下に入ったのでした。

広東省と広西省は、気候、風土、気性、言語、習慣等大分違います。亜熱帯と山岳地帯、モンsoon地帯と山国、温和と剽悍、広東語と広西語、開放性と閉鎖性等々数えたら切りがなく、これが同一の中国人かと疑問に思いました。通訳も広東語が通ぜず泣いていました。

ほんのしばらくの間でしたが、次の次の作戦まで貴県西方の漂塘墟に進出しました。第二中隊は鬱江南岸へ、第四中隊は東津埠に移動し貴県周辺を固めました。

昭和二十年二月、柴田中隊長が本部付となり田中第一小隊長が中隊長に室村少尉が第一小隊長になりました。

貴県地区でも小競り合い、討伐の繰り返しでしたが、三月に入り我が大隊は大湾、来賓地区に集結を始

めました。第一中隊は来賓城に入り、第二中隊は穿山墟へ、第四中隊は大湾に、第三中隊は本部と共に大湾周辺に配置されました。

昭和十九年に第二十三軍、第四百師団（鳳）が柳州攻略戦を行ったところで、独歩第六十六大隊が再び苦闘を強いられたのです。大陸作戦でも日本軍は末期的現象を呈し、今世紀最大の湘桂作戦も撤退作戦となり、我が大隊は殿部隊となったのです。それを聞いて、撤退部隊の最後の部隊かとかっかりするより、ぞーっとしました。

支那派遣軍の「湘桂沿線の撤収」決定により、仏印から続々と陽動作戦をやりつつ反転が始まりました。兵器、弾薬、食料、衣服も補給がままならず大作戦を断念したのでしよう。

さあ、それからが大変です。独歩第六十六大隊で敵の大軍を一手に引き受けたようなものです。我が中隊の防禦線を突破すべく敵の大部隊が来襲し、大激戦になり、ついに本部へ第四中隊の応援を求めました。田中隊長以下第一中隊は来賓手前の丘を占領し、友軍の

進出を容易ならしめたのです。

翌日、本部、第一中隊、第四中隊は本部から出撃し、敵分哨のある水落堰陣地に猛攻を加え、これを奪取、そこから敵拠点に猛攻を加え敗走させましたが、これが撤収作戦の彼我入り乱れての激戦の始まりでした。

来賓から柳州へ出るにはどうしても白朋街・大鳥山・羅漢山の嶮を突破しなければなりません。そこを避けて平坦部を通過しようとする第三師団（幸兵団）を追尾してきた重慶軍の中央を突破しなければなりません。敵の包囲を受け全滅寸前の第四中隊は夜陰に紛れて白朋街を脱出しましたが、この第四中隊を除き大隊の全滅を賭しての死闘で、犠牲も大隊創設以来のものでした。今、振り返っても、よくぞ生きて帰ってこられたの一語です。

第一中隊とて例外ではありません。四〇〇人そこそこの我が大隊に対し、敵は米式完全装備の最新鋭正規軍です。その上弾薬・食糧の補給のない我が軍に対し、敵は米軍機による空輸です。小銃弾がなくなりかけ、

空から補給される落下傘を見てどれだけ切歯扼腕した
ことか。敵は小兵力と侮り、鎧袖一触と襲いかかつて
きましたが各中隊とも頑強に抵抗し、敵は至近戦の攻
撃をあきらめ、砲撃に重点を移したのでした。

一万五千の敵は前後に充満し、我が軍は一刻も早く
柳州に反転しようと思死でした。各部隊の柳州への反
転と北上が交錯し、攻勢・防禦・撤収・反撃が繰り返
され、極端なことを言いますと中隊内で小隊が入り乱
れ、大隊内では中隊も入り組んでいました。

我が中隊の長堀小隊と機関銃小隊が無名高地を占
領、白朋街を威圧し、また大鳥山で苦戦中の第三中隊
の援護射撃をしました。そのうち我が陣地にも迫撃砲
が撃ちこまれ、軽機の絶え間ない射撃がありました。
私も夜間の無名高地占領の時は第一小隊員として中隊
の右翼に加わり、敵の集中火力を冒し晝の突撃を敢行
しました。

無名高地に小哨を残し中隊本部は後方の部落まで下
がりました。明け方敵襲があり数時間の撃ち合いのあ
と後退し、その後中隊は直ちにそこを撤収、無名高地

に向かいました。

大鳥山では第三中隊が全滅の危機にさらされなが
ら、砲撃・射撃・手榴弾戦を繰り返して陣地を死守して
いました。時たま、火焰放射器・点火・油の散布によ
る枯れ草の燃焼がありました。最後には喚声をあげて
の近接戦と想像以上の激戦らしかったです。これは武
穴の抑留生活の折、断片的に聞いたものです。

六月二十四日の早朝から日没まで敵は無名高地の第
一中隊に執拗に攻撃を繰り返しましたが、第二・第三
中隊の協力でこれを撃退しました。第三中隊は死傷者
続出し、兵力は半分以下になったそうです。

大隊は、無名高地・大鳥山の陣地確保により殿部隊
の役目を果たし、六月二十五日の深夜に大鳥山を撤収
し、羅漢山に向かいました。死傷者の処置を済ませ、
夜陰に乘じ離脱していきました。第一中隊は先頭にな
り敵の妨害を排除しつつ本部と共に無名部落に入りま
した。

第二中隊は逆包围を受けつつも本部の協力で頂上に
向かいました。我が中隊は無名部落を出立し左より攻

撃を開始しました。白朋・羅漢の距離は五キロぐらいで、七〇前後の担架と傷兵を擁し敵重囲下の中を脱出し、既に敵の手中におちた羅漢山付近で敵の進撃と邀撃に遭い、人は倒れ、愛馬も斃れる戦況の中で全滅を覚悟しました。中隊長以下、獅子奮迅の勢いで難局を打破し、六月二十六日午後六時頃羅漢山を完全に占領しました。これにより柳州を指呼の間に臨み、北上への道が大きく開け、中隊長以下ほっと一息ついたのでした。

ともかく、大鳥山・羅漢山の戦闘はひどいものでした。発撃てば十倍の弾が返ってきました。それに空中補給、バズーカ砲、自動小銃と、我が軍より戦力は勝っていました。夜襲と突撃がないことが我々に何よりの幸いでした。全山岩山で弾は跳ね返るし、円匙では掩体壕も掘れません。自然の洞穴に身を隠すのが精いっぱいです。分隊と分隊、小隊と小隊の戦闘より個人対個人の戦闘でした。誰がどこで死んだのかははっきり記憶にない兵もいます。

羅漢山を占領し包囲陣を破った独歩第六十六大隊は柳州方面へ教縦隊をもって前撃して来た敵の大軍に対する任務を全うし反転の命を待っていました。またそこで別行動の第四中隊も収容したのが六月三十日でした。

七月一日、第四中隊が殿となり柳江渡河を完了しました。しかしこれで敵から完全に離脱したわけではなく重慶軍と並列的に、ある時は交錯的に北上しました。

桂林を通過後、大容口、六層嶺で、仏印から撤退部隊の援護にあたりました。

昭和二十一年六月鹿兒島に上陸、千葉県の東金に知人を頼って復員しました。長兄が事業に失敗し家が破産したので友人と製塩業を始めました。三年ほどは稼げたのですが塩田の復活、外塩の輸入で塩田は潰れてしまいました。

その後、縫製の仕事をやり今日に至っております。今年、最後の姉が亡くなり十三人の兄弟で生き残りは

私一人になってしまいました。

鯨兵団の一員として

桂林・南部粵漢戦

愛媛県 高橋 進

大正十二年十二月一日、愛媛県の農家の次男として生まれ、姉妹なしの男ばかりの兄弟七人の家庭であった。長兄は昭和十五年十二月一日、現役兵として高知の歩兵連隊へ入営、中支の第四十師団歩兵第二三六連隊（鯨第六八八四部隊）へ出征中であつた。その後私は大阪の被服廠へ徴用となつたが、勤務は予想外に厳しく、点呼で対抗ピンタを取られることもあつたので、進んで兵役の志願をした。

昭和十七年十二月一日、歩兵第二三四連隊要員として歩兵第一一二連隊補充隊第二中隊へ入営。十二月十七日、転属のため丸亀を出発。以後下関、新義州で朝鮮へ入り、山海関を通過し、北支那より南下し中支へ

と輸送された。

その輸送中の出来事であるが、浦口より南京へと揚子江を渡り、兵站宿舎で二日間を過ごした。同年兵戦友と三人で景色の良い所へ行ったら、歩哨に捕まり衛兵所へ連行され、衛兵司令より気合を入れられて、顔は腫れ上がり、口の中は切れて出血。ほうほうの態で宿舎へ帰り上官（兵長）に報告。兵長殿は「よし！その衛兵所へ俺を連れて行け」と新兵三人を同行して衛兵所で「前線の第一線要員として輸送中の大事な兵を、些細なことで傷つけるとはどういうことか。南京あたりの後方で案に警備しているお前等とは大違いの大事な兵だ。何故殴つたか？理由次第では承知せん。上級の隊長と談判する。返事は？」と恐ろしい剣幕で抗議した。同じ兵長の衛兵司令も最後には陳謝して事はすんだ。私等三人は「頼りになる兵長殿！」と信頼を高めた。

その後武昌を経て、昭和十八年一月七日湖北省汀橋着、第一中隊に編入。三月三十一日汀泗橋出発、四月十一日湖南省華容に着く、その駐屯中、一週間に一回